2025 Bionic Jack Racing FIA-F4 選手権レースレポート

【FIA-F4 選手権シリーズ第 4 戦・第 5 戦】

富士スピードウェイ（静岡県：4.563km）
8 月 2 日（土）予選、決勝レース第 4 戦：晴れのち曇り／ドライ　入場者数：24,900 人
8 月 3 日（日）決勝レース第 5 戦：晴れ／ドライ　入場者数：27,400 人

#97 三浦　愛

#97　三浦 愛 Bionic Jack Racing

#98 IKARI

#98　IKARI　Bionic Jack Racing

三浦愛が第 4 戦で自己最上位更新、2 レースとも女性ドライバー最速は譲らず
予選でのミスが悔やまれる IKARI、決勝では本領発揮を許されずに終わる

高木真一監督率いる Bionic Jack Racing は、今年も全 14 戦で争われる FIA-F4 選手権に 2 台体制とし、引き続き IKARI を、そして新加入の三浦愛 IKARI を擁して臨む。第 2 大会の舞台は富士スピードウェイだ。

メインレースである SUPER GT が間にマレーシアでの海外戦を行ったため、FIA-F4 としては実に 3 か月ぶりの開催ではあるが、テストも行われて IKARI、三浦とも前大会の反省点を見直すことができた。同じ富士での開催ながら、春から夏に季節も移っており、異なるコンディションにしっかり対応できるかが、結果を左右することとなりそうだ。

◆予選

#97 三浦 愛 チャンピオンクラス第 4 戦 15 番手／第 5 戦 22 番手
#98 IKARI　インディペンデントクラス第 4 戦 13 番手／第 5 戦 13 番手

今大会も専有走行は木曜日から、1 回目はクラス別、2 回目は混走で行われた。インディペンデントクラスでは前大会からの勢いを保っていた、IKARI は 1 回目に 1 分 50 秒 082 を、2 回目は 2 分 50 秒 125 をマーク。一方、チャンピオンクラスの三浦はテストを行ったことで、マシンの理解度は増したと自ら語っており、1 回目は 1 分 48 秒 481 を、2 回目は 1 分 48 秒 895 を記していた。

金曜日も同様に 2 回ずつ行われ、IKARI は 1 回目で 1 分 49 秒 338 にまでタイムアップを果たす。2 回目は混走であり、また路面温度も上がったことで 1 分 50 秒 329 に留まったものの、手応えはつかんでいたようだ。三浦もまた 1 回目は 1 分 48 秒 505 を記した一方で、「タイヤを壊したかも……」と語る 2 回目は 1 分 49 秒 186 に留まっていた。

金曜日までは台風接近の影響もあり、時折爽やかな風が吹いたりしていたが、離れてしまった土曜日以降は、それも期待できず。また普段ならば早朝に行われる予選は、SUPER GT がスプリント 2 レースでの開催のため、昼前のスタートとなって、より猛暑との戦いにもなっていた。

まずはチャンピオンクラス。三浦は計測 1 周目から、このレースウィーク最速となる 1 分 48 秒 239 をマークし、その後も 1 分 47 秒 728、1 分 47 秒 671 と好タイムを連発して上位につける。その後いったんタイヤをセーブして走り、終了間際に 1 分 47 秒 359 まで縮め、チェッカーが振られた周もストレートでスリップストリームが使えれば、さらなる短縮も期待できたはずが、まわりはピットに戻ってしまい、三浦もアタックを終えざるを得ず。それでもベストタイムでは自己最上位となる 15 番手を、セカンドベストタイムでは 22 番手を獲得した。

続くインディペンデントクラスでは、IKARI は慎重にウォームアップを行い、徐々にタイムを詰めていくことに。計測 3 周目に 1 分 49 秒 874 を記録し、そこから 2 周後には 1 分 49 秒 535 まで縮め、まさに「さぁ、これからだ！」というタイミングで、コカコーラコーナーの縁石に乗ってコントロールを失い、コースアウトしてマシンを止めてしまう。そのため、ベストタイム、セカンドベストタイムともに 13 番手に終わる。

◇三浦愛

「最初のうちにスリップ（ストリーム）をうまく使えて、タイヤのピークにも合わせてタイムが出せて。あとは暑いのでタレないようにクール入れながら、無駄にタイヤを使わないように、ちょっとずつ詰めていこうとしたんですが、一発は最終的に 7 秒 3 まで出せたんですよ。でも、最後の周、またスリップ使って行けそうだったんですけど、みんな、やめちゃったから、自分もやめざるを得ず……。セクター2 の自己ベスト出せたので、もうちょっと伸び代あったかな、と思いつつ。それでも今週、F4 出て、いちばんいいフィーリングで自分自身も、マシンも走れているので、自己ベストを出せたというのが一安心。ロガーを見ていても足りないところ、自分の苦手なところはもう少し克服していかなきゃ、とは思いますが、決勝も順位を守るというより、いろんなものを収穫して帰れるように頑張りたいと思います」

◇IKARI

「いや〜、車はすごくいいんですよ。だから調子乗っちゃった。前が空いたんで、いこうと思っていたら、ほんのちょっと縁石に乗っちゃって、A コーナー（コカコーラコーナー）のクリップで。本当にもったいないんですけど、ポーンと跳ねて。いや〜、残念！あと 1 秒は楽に縮められる車になっていました。めちゃくちゃいい車だったので、もったいないなぁ。決勝は後ろから淡々と走ります」

◆決勝レース第 4 戦

#97 三浦 愛 チャンピオンクラス 15 位

#98 IKARI　インディペンデントクラス 12 位

レース 1 こと第 4 戦決勝も通常とは異なり、土曜日のトリを飾ることとなった。三浦が着いたグリッド、15 番手は一般的に「最も危険」とされるポジション。ややストール気味ながら、大渋滞の 1 コーナーを接触もなく駆け抜けていくも、その後方ではアクシデントが発生。スタートに出遅れ、さらにオイルを吹き上げる車両があったのだ。これがまさに IKARI の目の前！　やむなくアクセルを抜いた瞬間、後続車両が容赦なく抜いていく。

先頭集団がコカコーラコーナーに差しかかったところでセーフティカー（SC）ボードが出され、すぐに赤旗に切り替えられる。そのオイルはコカコーラコーナー付近まで及んでいたため、処理には多くの時間を要し、30 分のタイムリミットが迫っていく。SC スタートで再開された時点で、残り時間は 10 分を

切っていた。三浦は 16 番手、IKARI は 13 番手からのリスタートに。
SC 先導は 2 周。チャンピオンクラスこそ混乱なく 1 コーナーをクリアしていったが、インディペンデントクラスでは接触が！　再び SC が導入され、レースは 5 周目を終えた時点でタイムアップ。三浦、IKARI ともになす術なくレースを終え、三浦は 15 位で FIA-F4 での自己最上位を記録し、IKARI は 12 位となった。

◇三浦愛
「スタート、ストール気味になっちゃったんですけど、まわりもそんなに良くなくて。リスタートもちょっと出遅れた感じが自分でもありました。あの少ない周回の、２回あったスタートで自分ができたこと、やれていたら、少しタラレバですけど、もう少し順位上げられていたはずなので、そういった意味では自分自身の反省点が多いレースになってしまいました。次のレースに向けて、いいモチベーションを持って臨める、いい教訓になった感じはしますが、ちょっと反省点は多かったかなと思います。ただ、順位としては今年いちばん良かったし、最低限はギリギリセーフ。次はちょっと後ろからのスタートですから、しっかり自分のレース作って、順位を上げて帰ってきたいと思っています」

◇IKARI
「目の前にいたんですよ（オイルを吹いた車が)、『やばい！』と思って。ついついアクセル抜いたら、みんなにダーっと行かれて。歳だなぁ、もう。反応鈍いし、いや〜。バトルなんかできないですね、何もやってない。最後の 1 コーナーは前も空いていたから、僕はイン側から問題なくかわせたけど……。まぁ、情けない。何やってもいいことなし。明日は気持ちよく終われるように、頑張ります」

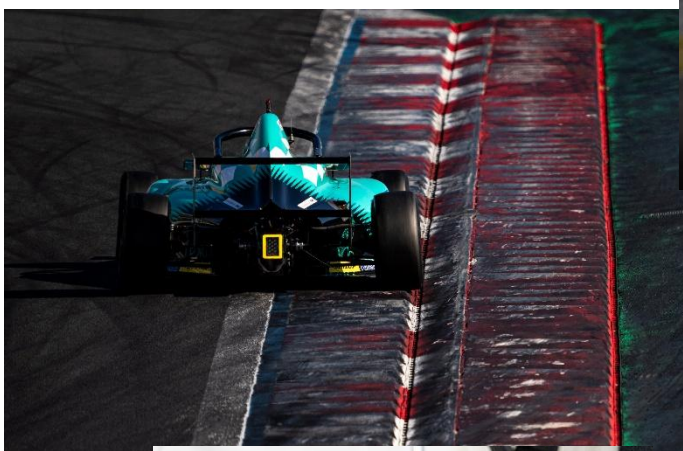
◆決勝レース第 5 戦
#97 三浦 愛 チャンピオンクラス 17 位
#98 IKARI　インディペンデントクラス 15 位

日曜日のレース 2 こと決勝第 5 戦も早朝からではなく、SUPER GT の公式練習後に行われたから、いつもよりゆっくり起きたというドライバーや、チーム関係者もいたのでは？　この日も暑さ厳しく、ホットな戦いになるのは必至だが、願わくば SC が一度も出ないように。
22 番グリッドからスタートした三浦だが、1 コーナーでのトラフィックも無事クリアして、オープニングラップのうちに 20 番手に浮上。IKARI もまた、クラス 9 番手にまで順位を上げる。しかし、三浦はその後もバトル真っ最中、いったんは遅れをとるも大きく離されることはない。冷静に周回を重ね、先行車両の交代もあって、やがて順位を戻す。
一方、ポジションキープの IKARI ながら、6 周目の 1 コーナーでスピンした車両との接触を回避しようとしてコースアウト。ガードレールへのヒットは免れたものの、コース上に横たわってしまう。あわや SC 導入の後継だったが、自力で復帰。しかし、最下位へと後退してしまう。
三浦は 7 周目に 1 台、8 周目に 1 台抜いて 18 番手に。そして 12 周目にはドライビングスルーペナルティを課せられた車両もあって、最終的には 17 位でフィニッシュ。バトルも繰り返したことで、得られた収穫はきっと大きいはずだ。
復帰後の IKARI は危なげない走りを見せたものの、追い上げもままならず 15 位でゴール。この悔しさを次回以降にぶつけてほしい。
第 3 大会は 3 週間後の 8 月 23〜24 日に、鈴鹿サーキットで開催される。特に三浦にとっては、走り慣れたホームコースでの戦いだ。IKARI のリベンジとともに期待したい。

◇三浦愛

「バトルはいろいろありましたけど、そんなに危ないというのはなくて。逆に前でやり合ってくれたのを運良く抜けられたのもありました。スター後の2〜3周で抜かれちゃったのが、いくつかあって。ちょっと自分の苦手なところなんですけど、そこで行かれたというのが反省点としてあります。後半は前にもしっかり着いていってバトルして、ポジションを上げて帰ってこられたというのは、ひとつ形になったかなと。みんな、ほとんどタイム変わらないので、どう頭を使って上がっていくかというところでは、レース経験長いので、その分は少しアドバンテージになったかなというのと、守りに入るんじゃなくて攻め続けるというのを最後までできたのは、自分でも良かったと思います。予選は苦戦しましたが、3人いる女性ドライバーの中で、いちばん前でチェッカー受けられたので、次に向けてやるべきことが明確になってきました。次の鈴鹿ではなんとか今回よりもいいレースができるよう、また準備したいと思っています」

◇IKARI

「1コーナーで前の車が横向いて、コース上で止まると思って、右側から行こうと思ったら、こっちに飛んできて。『ええっ！』と思って芝生に逃げたんですけど、なんとか避け切れたら、目の前ガードレールで。『ああ、こっちだった』って左に切ったら、コース上でぐるっと。すいません。スタートは良かったのに、もったいない。あとストレートが遅い。100Rとかでオーバー出ないようにしたんだけど、ウィングちょっとで全然変わっちゃって。やっぱりここはストレート重視じゃないとダメですね。最終立ち上がってスリップついているのに離されちゃう。それにしても情けない。予選がすべてでした」

BIONIC
JACK
RACING
97